

No.	提 案 名	提 案 团 体 名	
		代表者氏名	所 属
8	サッカーによる宇都宮の活性化	作新学院大学 那須野ゼミナール3年生	
		岡崎 光平	作新学院大学 経営学部
		指導教員 氏 名	那須野 公人

<目次>

1. 研究のねらい
2. 栃木 SC の現状
3. アンケート結果
4. プロチームの成功事例に学ぶ
5. 各地の自治体の取り組みに学ぶ
6. 提案

1. 研究のねらい

今若者に最も人気のあるスポーツはサッカーである。Jリーグ発足以来、各県に次々とプロサッカーチームが誕生し、栃木県でも栃木SCがJ2に昇格したが、入場者数はそれほど多くはなく、大幅な赤字に苦しんでいるようである。

J2元年であった2009年度の栃木SCの決算は、4,800万円の赤字であった。スポンサー収入やチケット収入の伸び、Jリーグからの分担金等で前期比2億1,300万円の増収となったが、選手の人工費や運営費用がかさみ、総支出が6億2,700万円（前期比1億9,000万円増）となったためである。その結果、クラブは4年連続の赤字となり、累積赤字は2億2,400万円となってしまった（黒字は1度もなし）。

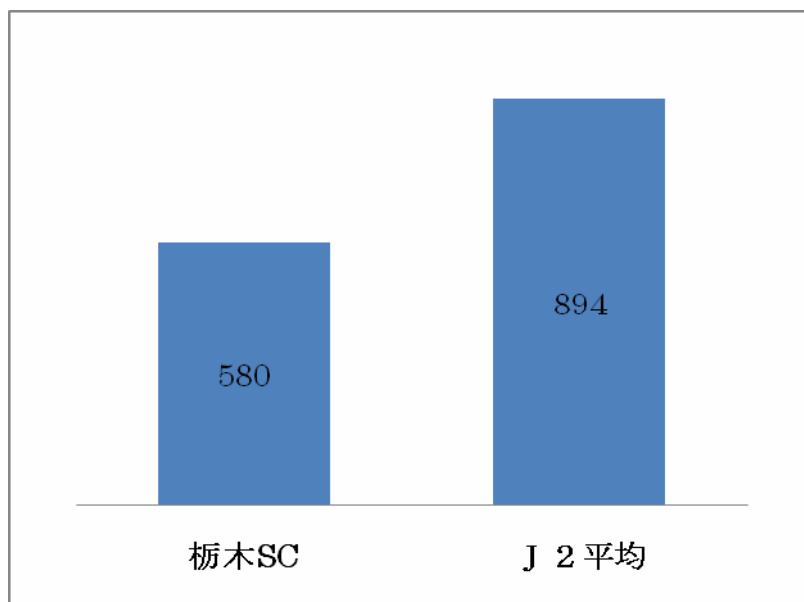
観客も決して多くはなく、今期第15節の岐阜戦は、チームがJ1昇格目前の4位に順位を上げていたにもかかわらず、県グリーンスタジアムの入場者数は3,294名にとどまったという（収容人員1万人…1/3しか埋まらず）。入場者数は相手チームに有名選手（札幌の中山、千葉の巻等）がいるかどうかによって左右されているのが現状である。

栃木SCは県民のチームでもあるが、ホームが宇都宮市の県グリーンスタジアムであることから、栃木SCの活性化は宇都宮市の活性化に直結すると考えられる。そこで、栃木SCの問題点を明らかにしたうえで、アンケート調査や他のプロチームの成功事例、さらには各地の自治体の取り組みに関する研究にもとづき、栃木SCの成功による宇都宮活性化とそのための宇都宮市の支援策を提案したい。

2. 栃木SCの現状

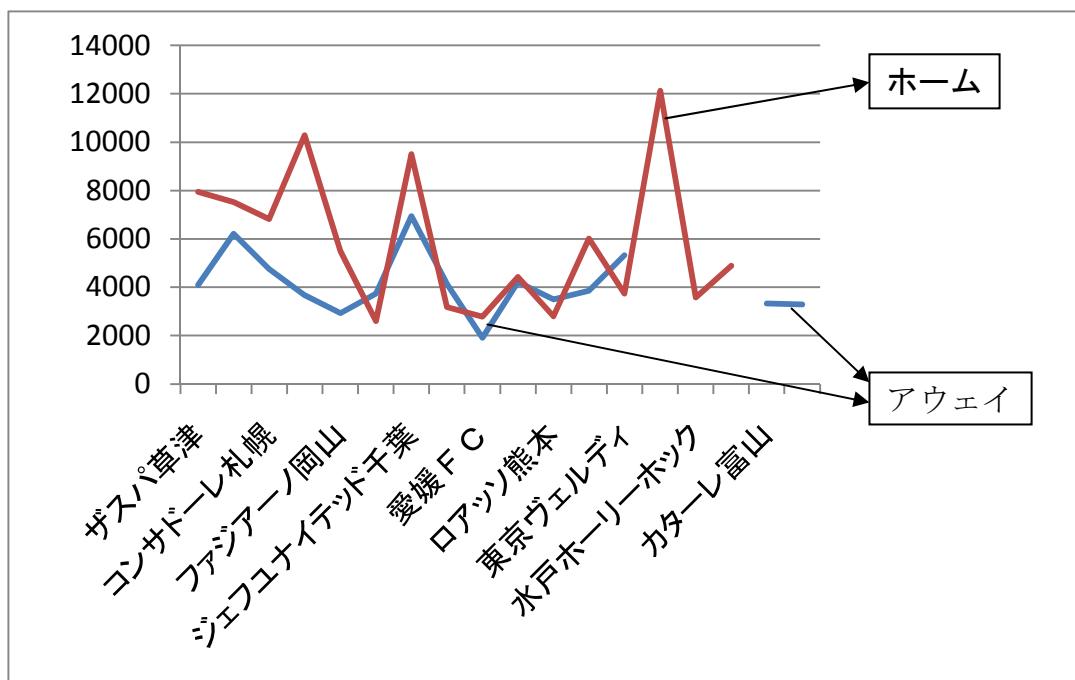
まず、2009年の栃木SCの収入をJ2平均と比較してみた（図1参照）。栃木SCの収入は、J2の約65%でしかない。次に、2010年の栃木SCの入場者数（11月14日現在）は、J2平均が6,635人であるのに対して4,222人であり、これはJ2全19チームの中16位（後ろから4番目）となっている。

図1 栃木SCの収入とJ2平均との比較〔2009年〕
(単位:百万円)



(出所) Jリーグ公式サイトの数字より作成。

図2 栃木SCのホームとアウェイでの入場者数比較〔2010年途中経過〕
(単位:人)



(出所) Jリーグ公式サイトの数字より作成。

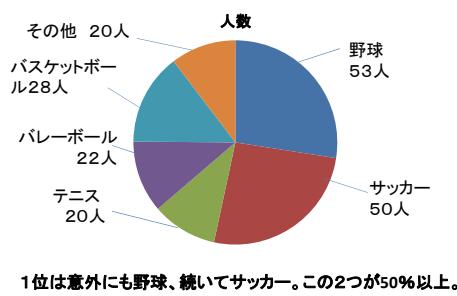
栃木SCの入場者数をホームゲームとアウェイでのゲームに分けて分析したものが図2である。アウェイでは、波は激しいがかなりの入場者数となっている。これに対してホームでの入場者数は4,000人前後のところにあり、低迷していることがわかる。具体的には、アウェイでの入場者数が1試合平均約6,800人であるのに対して、ホームでの入場者数は1試合平均約4,500人となっている。

このような入場者数の低迷が、収入の低迷につながり、赤字が続いているものと思われる。

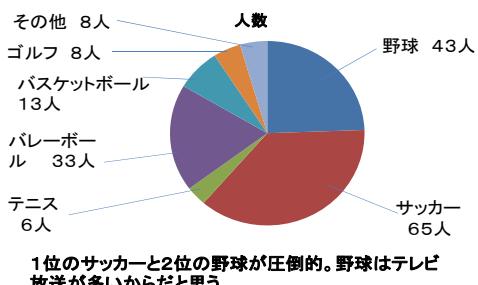
3. アンケート結果

作新学院大学経営学部の学生を対象に、スポーツに関するアンケートを行い、サッカーに対する関心、栃木SCに対する関心等を調査してみた（回答者数：110名）。

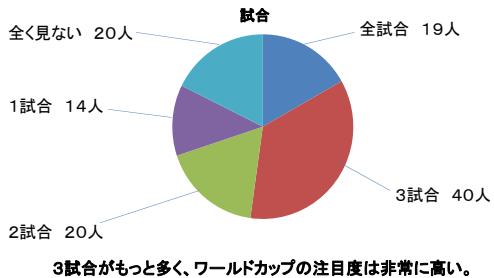
問1. 好きなスポーツは？（複数回答可）



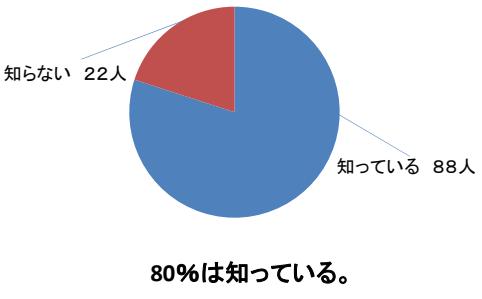
問2. テレビでよく観戦するスポーツは？（複数回答可）



問3. ワールドカップ日本戦をテレビで何試合見ましたか？



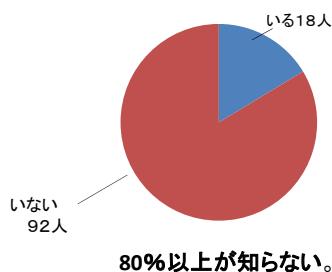
問4. 栃木SCを知っていますか？



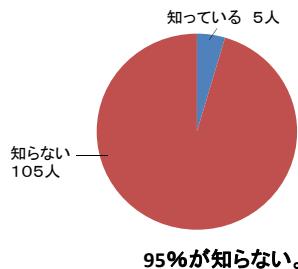
まず、問1として「好きなスポーツは？」と聞いたところ、意外にも野球が第1位で53人、サッカーがこれに次いで50人であった。しかし、問2で「テレビでよく観戦するスポーツは？」と聞いたところ、サッカーが65人で第1位、野球が第2位で43人となった。やはりサッカーの人気はかなり高いことが確認できた。なお、野球が多いのは、テレビ放送が多いことも関係しているものと思われる。

問3では、「ワールドカップ日本戦をテレビで何試合見ましたか？」と聞いたところ、3試合と答えた人が最も多く、ワールドカップへの注目度は非常に高いことがわかった。

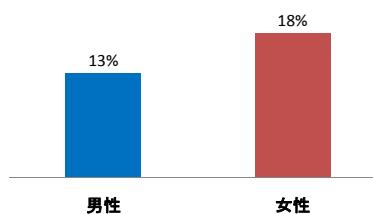
問5. 栃木SCに知っている選手はいますか？



問6. 栃木SCの監督を知っていますか？

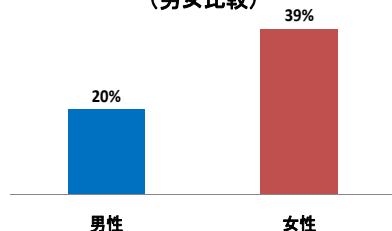


問5-2. 栃木SCに知っている選手がいる割合(男女比較)



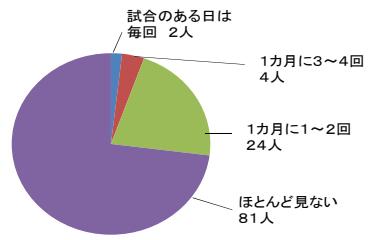
意外にも女性の方が、栃木SCの選手を知っている。

問7-2. Jリーグのシーズン中、テレビでサッカーの試合を見る割合 (男女比較)



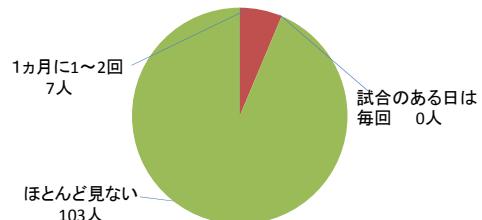
女性の方が、テレビでJリーグの試合を見ている。

問7. Jリーグのシーズン中、どの程度テレビでサッカーの試合を見ますか？



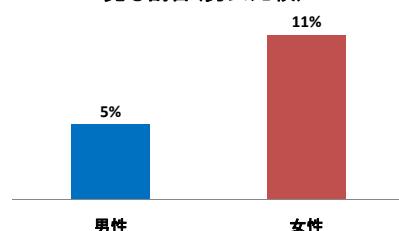
70%以上がほとんど見ない。

問8. Jリーグのシーズン中、栃木SCのテレビ放送をどの程度見ますか？



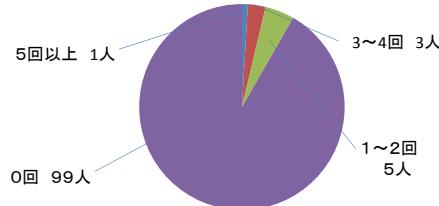
94%がほとんど見ない。

問8-2. テレビで栃木SCのテレビ放送を見る割合(男女比較)



女性の方が、テレビで栃木SCの試合を見ている。

問9. 昨年栃木SCの試合を、どの程度スタジアムで観戦しましたか？



90%は全く行っていない。

問10. 見に行かない理由は、次のうちどれですか？(複数回答可)

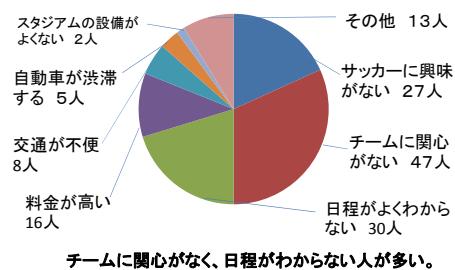
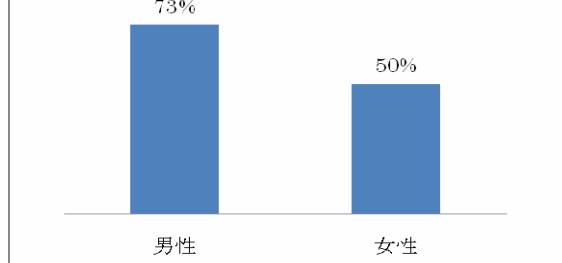


図3 W杯を3回以上見た人で、Jリーグの試合をあまり見ない人の割合



問4では、「栃木SCを知っていますか？」と聞いてみた。さすがに、80%の人が知っていた。しかし、問5で「栃木SCに知っている選手はいますか？」と聞いたところ、80%以上の人が知らなかった。ただし、これを男女別に比較してみると、男性が13%であるのに対して女性は18%と、意外にも女性の方が栃木SCの選手を知っていた。問6では、「栃木SCの監督を知っていますか？」と聞いたところ、実に95%の人が知らないと答えた。

問7では、「Jリーグのシーズン中、どの程度テレビでサッカーの試合を見ますか？」と聞いたところ、70%以上の人気がほとんど見ないと答えた。そこで、これを男女別に比較してみると、男性の20%に対して女性は39%と、やはり女性の方がテレビでJリーグの試合を見ていることがわかった。問8では、「Jリーグのシーズン中、栃木SCのテレビ放送をどの程度見ますか？」と聞いたところ、94%の人がほとんど見ないと答えた。そこで、これを男女別に比較してみると、男性が5%であるのに対して女性は11%と、やはり女性の方がテレビで栃木SCの試合を見ていることがわかった。女性の方がサッカーのテレビ中継を見ているのは意外であった。問9では、「昨年栃木SCの試合を、どの程度スタジアムで観戦しましたか？」と聞いたところ、90%の人が全く行っていないと答えた。問10では、「見に行かない理由は、次のうちどれですか？」と聞いたところ、チームに関心がなく、日程がわからないという人が一番多いことがわかった。

サッカーの人気は高く、W杯等代表戦のテレビ中継はよく見ているとはいえ、Jリーグの人気は必ずしも高くはない（図3参照）。そして、栃木SCに対する関心はさらに低いことがわかった。

しかし、近年「歴女」「山ガール」といった言葉に象徴されるように、かつて女性がほとんどみられなかつた場所に女性が一人で出かけるといった現象が現れてきており（若い女性の「おひとりさま行動」）、今や女性の進出エリアは野球場、サッカースタジアムにも拡大しつつあるという。上記アンケートに見られるような、サッカーに対する一部男性を上回るような高い関心は、女性の入場者数増加の可能性を示唆するとともに、そのことによって男性の入場者数を増加させるといった戦略の有効性を示す結果とも考えられる。

4. プロチームの成功事例に学ぶ

栃木 SC の活性化により宇都宮の活性化を図るために、Jリーグの成功事例と日本リーグで優勝したリンク栃木ブレックスの事例を調べてみたい。アルビレックス新潟は、日本海側の地方都市を本拠地とするサッカーチームの「奇跡的」な成功事例として有名である。同チームが J1 昇格を決めた 2003 年の大宮アルディージャ戦には 4 万 2,223 人がつめかけた。この数字は、栃木 SC の入場者数が 4,000 人余であることから、栃木 SC の入場者数の 10 倍というまさに奇跡的な数字である。この年アルビレックス新潟は、J2 のチームであるにもかかわらず、Jリーグの歴代年間観客動員数の最高記録を塗り替えた。しかし、アルビレックス新潟も当初から入場者数が多かったわけではない。きっかけは、4 万 2,300 人収容のスタジアム、ビックスワンの完成（2001 年）であった。それまでの観客数は現在の栃木 SC とほぼ同じ 4,000 人程度であったが、スタジアムのこけら落としに何とかスタジアムを満員にしたいと考え、自治会や学校経由で 10 万枚の無料券を配布した。その結果、予想を上回る 3 万 2,000 人がスタジアムをうめた。試合には負けたとはいえ、大観衆の前で選手は必死にプレーし、スタジアムは大歓声で盛り上がった。新しいスタジアムを見に来たという人も多かったというが、サッカーの面白さを知ってリピーターが増加し、着実にサポーターが増えていった。無料券であっても、来場者はスタジアムで飲食をし、グッズも購入することから、経済効果も大きかったという。

リンク栃木ブレックスについては、いうまでもなくチーム設立わずか 3 年で日本リーグで優勝し、しかも黒字を実現させたことから、これも関東の地方都市を本拠地とするバスケットボールチームのまさに「奇跡」とたたえられている。

そこで、この両チームと栃木 SC の設備・取組等を比較してみた（図 4、5 参照）。

表 1 スタジアム等の設備比較

	車いすの完備	託児所の完備	グルメ充実度
アルビレックス新潟	○	○	◎
リンク栃木ブレックス	○	○	△
栃木 SC	○	×	△

（出所）各チームのウェブページより作成。

表 2 各チームの地域貢献活動

	地域イベントへの参加	主催イベント活動	小中学校への訪問
アルビレックス新潟	○	○	○
リンク栃木ブレックス	○	○	○
栃木 SC	○	○	○

（出所）各チームのウェブページより作成。

社会貢献活動には各チームとも積極的であるが（表2参照）、本拠地のスタジアム等の設備という点では、栃木SCは見劣りがする（表1参照）。現在栃木SCのホームであるグリースタジアムは改修中であることから、ぜひ託児所の設置も期待したい。また、アルビレックス新潟では、スタジアム内に17、スタジアム外のテントに8、計25の売店があり、多くの人々がこれらの売店で販売されているご当地グルメを楽しみに訪れるという。多くの観客を集めるには、このような形で試合以外の「非日常」の楽しみをさらに充実させることもきわめて重要であると考えられる。

図4 アルビレックス新潟「ビッグスワン」のスタジアム外グルメ等の様子



（出所）アルビレックス新潟公式サイトより。

5. 各地の自治体の取り組みに学ぶ

3つのプロチームを有する仙台（サッカーのベガルタ仙台（J2）、プロ野球の東北楽天イーグルス、バスケットの仙台89ERS（bjリーグ））では、2007年に「ベガルタ仙台ホームタウン協議会」、「楽天イーグルス・マイチーム協議会」、「仙台89ERSとともにまちづくりをすすめる会イエローブースターズ」の3つのプロスポーツ支援組織により、「仙台プロスポーツネット」が設立されている。その目的は、各支援組織が持つ知識・機能・情報・事業を連携させることにより、3球団の連携を進め仙台のプロスポーツを日本全国に発信し、さらなる地域密着、相互の活性化を図ることにあるという。事務局は、仙台市スポーツ振興課に置かれており、仙台市が中心的な役割をはたしている。地方都市では、スポーツに興味のある人口は限られる。3チームがひしめけば、パイの奪い合ともなりかねない。そのような状況の中で「プロチームは自分たちの財産」という思いで、ファンや自治体の支援によって3チームの共存共栄を図ろうというのが「仙台プロスポーツネット」である。これら3チームには、それぞれに官民一体の支援組織があり、その3組織の連絡調整機関として設置されたのが「仙台プロスポーツネット」である。具体的な目的は、スポーツファンの新規開拓と互いのファンの「共有化」であり、「同日観戦パック」の企画、「指導者クリニック」の開催、「仙台スポーツかるた」の作成、「スポーツ川柳」の募集、仙台プロスポーツフェスティバルの開催等を行っている。

また、横浜ベイスターズ（野球）、横浜・マリノス（サッカーJ1）、横浜FC（サッカーJ2）という3つのプロチームを有する横浜にも、次代を担う青少年に夢や目標を与え、市民の連帯感の醸成と地域の活性化を図り、市民スポーツの振興を図ることを目的として設立された「横浜熱闘俱楽部」がある。

Jリーグ関連では、九州においてJ2チームをかかる九州の5都市（福岡、北九州、大分、鳥栖、熊本）が、九州勢同士の対決「バトルオブ九州」を通じて、多くの人に5市を訪れてもらおうと特産品が当たる「スタンプラリー」を企画している。これは、台紙にスタンプ（各スタジアムに設置）を2~5種類集めて応募すると、スタンプ数に応じて「豊後牛」や「辛子めんたいこ」などの特産品（500~5千円相当）が抽選で当たるというものである。この母体となる組織は、「九州Jリーグホームタウン連携会議」である。

6. 提案

宇都宮市のプロチームの場合、それぞれ後援会やファンクラブがあり、栃木SCの後援会の特別顧問に市長が就任しているとはいえ、これは官民がともに参加してチームと地域の活性化を図ろうという仙台の「協議会」組織とは異なる。また、宇都宮市の場合にはそれらの協議会をつなぐ組織も存在しない。宇都宮では、官民だけでなく、そこに大学のスポーツマネジメント分野の研究者やファンの代表も加えた「産・官・学・民」の参加によるプロスポーツチームの支援組織と、それらをつなぐ「仙台プロスポーツネット」のような組織の結成に、宇都宮市がリーダーシップを発揮したらどうであろうか。そのことによって、日本を代表するプロチームの成功事例であるリンク栃木ブレックスの経験から、他のプロチームが多くのこと学ぶことも可能になると思われる。

また、宇都宮市も「九州Jリーグホームタウン連携会議」に学び、北関東のJ2チームを持つ前橋市や水戸市と連携して、「バトルオブ北関東」を仕掛けてみたらどうであろうか。

宇都宮市がリーダーシップを発揮することによって、栃木SCのみならず市内のプロスポーツチームをさらに盛り上げ、宇都宮の活性化を図ることは不可能ではないと考える。

＜参考文献＞

- ・「累積赤字2億2400万円 栃木SC株主総会 経営陣一新、中津氏社長に」SOONウェブページ（下野新聞）
<http://www.shimotsuke.co.jp/news/tochigi/top/news/20100428/315530>（2010年11月18日）
- ・「求められる財務体質改善 栃木SC新体制」SOONウェブページ（下野新聞）
http://www.shimotsuke.co.jp/news/tochigi/sports/t_sc/news/20100428/315552

(2010年11月18日)

- ・「<J1昇格圏へ 栃木SC 前期の躍進と後期の課題>（下）地道な活動で動員増へ順位と比例しない観客数」SOON ウェブページ（下野新聞）

http://www.shimotsuke.co.jp/news/tochigi/sports/t_sc/news/20100716/351995

(2010年11月18日)

- ・Jリーグ 公式サイト

<http://www.j-league.or.jp/aboutj/jclub/keiei.html#pagetop> (2010年11月18日)

- ・栃木SC 公式サイト <http://www.tochigisc.jp/> (2010年11月18日)

- ・リンク栃木ブレックス 公式サイト <http://www.linktochigibrex.com/> (2010年11月18日)

- ・「ガールたちの挑戦」『朝日新聞』2010年10月2日付。

- ・アルビレックス新潟 公式サイト <http://www.albirex.co.jp/> (2010年11月18日)

- ・「『アルビレックス新潟』、熱血サポーター誕生秘話」日経BPネット

http://www.nikkeibp.co.jp/style/biz/associe/come_from_behind/051201_albirex/index.html (2010年11月18日)

- ・江頭満正「Jリーグ経営難3 アルビレックス新潟」sport navi plus

<http://www.plus-blog.sportnavi.com/marketing/article/156> (2010年11月18日)

- ・上田里恵「<ベンチャースピリッツ>アルビレックス新潟会長 池田弘」Biz STYLE
<http://vl-fcbiz.jp/article/ac016/a000735.html> (2010年11月18日)

- ・「記者発表資料 仙台プロスポーツネットが設立されました」仙台市ウェブページ

<http://www.city.sendai.jp/soumu/kouhou/houdou/07/190501spsn.html> (2010年11月18日)

- ・「【プロ3チームと歩む 札幌の今後】上・なるか共存共榮」Doushin web (北海道新聞) <http://www.hokkaido-np.co.jp/cont/oh-sapporo/16552.html> (2010年11月18日)

- ・「仙台市の3つのスポーツを応援する、仙台プロスポーツネットが設立されました！」仙台市ウェブページ

<http://www.city.sendai.jp/shimin/sp-shinkou/pro-sp-net/index.html> (2010年11月18日)

- ・横浜熱闘俱楽部ウェブページ <http://www.nettou-club.com/index.html> (2010年11月18日)

- ・「あすからスタンプラリー J2九州対決」oita press (大分合同新聞)

http://www.oita-press.co.jp/localNews/2010_12720878967.html (2010年11月18日)

